

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02393

研究課題名(和文) 歌と絵と書の融合芸術としての歌仙絵作品の成立及び展開に関する抜本的総合研究

研究課題名(英文) Drastic Comprehensive Research on the Establishment and Development of Kasen-e Works as Fusion Art of WAKA Poem, Picture and Calligraphy

研究代表者

寺島 恒世 (Terashima, Tsuneyo)

武蔵野大学・日本文学研究所・客員研究員

研究者番号：80143080

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：歌仙絵において、従来研究に乏しい書の面から解明を進め、絵と歌との三者の融合芸術とされる歌仙絵の特性を捉え直した。

まず、入木道家資料に扱われる種々の書式を分類・整理し、それとの比較・検討を通して歌仙絵の多様な書式が成立する経緯を明らかにした。次に、三十六歌仙絵の歌につき、多系統に分化する実態を把握した上で「業兼本三十六歌仙絵」の選歌と編集を精査し、『時代不同歌合』を継承する意味と役割を再検討した。さらに歌仙絵史における『時代不同歌合』の先駆性を検証した。以上の絵・歌・書の検討結果を踏まえ、歌仙絵を多様な展開させる最も重い要因は、歌人と歌を対比して示す構造に認められることを導いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

主要課題とした歌仙絵の書につき、入木道の営みを取り上げ、書の専門の観点から、多彩な書き方の実態を把握し、その創意の由来を解明した。それをもとに、書式に見られる自然を踏まえた東洋的な構図と幾何学的な整序の構図は安易な対立関係にはなく、それらを総合する観点から問い直されるべきことを提言した。こうした日本文化の把握の見直しにも有益な書の面からの解明をもとに、絵と歌の再検討から得られた結果を踏まえ、歌仙絵の多様化に向かう要所を作品の番いの構造に見定めたことは、豊かに展開する歌仙絵作品の諸相を捉え直すために有効な知見をもたらすと判断される。

研究成果の概要(英文)： On Depictions of Immortals Poets which consist of pictures, waka poems, and calligraphy I examined the aspect of calligraphy, which has been little studied.

First, I analyzed the various forms of writing waka poems based on materials handed down by calligraphy specialists. Next, after confirming there many types of waka poems used in the various Depictions of Immortals Poets, I analyzed them in "Narikabon" and considered the meaning of inheriting "Jidai Fudo Uta-awase". In addition, I reexamined the pioneering meaning of the picture of "Jidai Fudo Uta-awase". From the results of the above analysis of pictures, waka poems, and calligraphy, it was concluded that contrasting poets and poems was important in the development of Depictions of Immortals Poets.

研究分野：人文学

キーワード：歌仙絵 書式 散らし書き 色紙 番いの構造 時代不同歌合

1. 研究開始当初の背景

先の「歌仙絵の資料調査とその成立及び流布に関する総合的研究」(基盤研究(C)平成 23 年度～26 年度)において、「三十六歌仙絵」の諸本は佐竹本系・業兼本系に大別でき、両者の性格の差異が、それぞれ固有の本文を生成させる経緯を解明した。そこで課題となったのは、「絵」と「歌」と「書」からなる歌仙絵作品の「書」の面における追究である。とりわけ、業兼本系本文固有の形式に通常の日本語表記にない左から右へ行を移して書く形の「左書き」があり、広く採用され続けるその書式の実態を解明することが、歌仙絵作品の成立と展開を考えるために有効と判断された。「俊忠本三十六歌仙絵」を嚆矢とし、中国の書画とも類似するこの表記には、例えば向かい合う歌仙の声を再現する志向が窺われ、絵巻における「画中詞」に類する機能も想定される。さまざまに展開する歌仙絵作品の和歌は、作品ごとに多彩な書式で記されている。それらの展開と機能を解明することは、歌仙絵作品の特性を捉え直すために必須の課題となっている。

2. 研究の目的

歌仙絵作品の「絵」と「歌」とは対照的に、「書」についての研究は未着手の状態にある。書道研究においても歌仙絵に関わる書の解明は、一部を除き等閑視されてきた。特に散らし書きには遊戯性を有するものを含め、あるべき書とは無縁と見える試みも少なくない。ただし、入木道(書道)家にはそれらの実践の例と言説が豊富に残されている。本研究は、『三十六歌仙』・『百人一首』・『時代不同歌合』等の歌仙秀歌撰を素材とする歌仙絵を対象に、多様な和歌の記され方を分類・整理するとともに、和歌表記に関する入木道関連書の記述を集成し、分析を行う。書の実態と書法をめぐる理論を鮮明にし、両者の関連を問い直した上で、日本語表記史上特異な「左書き」の事例を含む歌仙絵の作品における和歌書式の成立と変容の様相を明らかにする。入木道の世界における実践と伝承を通じた検証により、歌仙絵の「書」の課題の解決を図った上で、「絵」と「歌」の両面の検討を併せ、三者の融合芸術とされる歌仙絵作品の特性を捉え直すことを目的とする。

3. 研究の方法

『三十六歌仙』・『百人一首』・『時代不同歌合』関係の書を基本に、入木道家の諸資料をもとに、当家における書の実践と伝承の実態を明らかにする。ほかに歌合形式のもの、和歌と漢詩を番える詩歌合を含む諸歌仙秀歌撰を対象に、絵の有無にかかわらず、各作の和歌がどのような書かれ方をするのかを検討し、その実態を書道研究において解明されてきた諸成果を踏まえて分類し、整理する。

併せて、入木道家の諸資料のうち、書式の継承に言説や実践方法等理論に関する叙述を集成する。それらをもとに、書の世界で続けられた実践との異同を丁寧に検討することを通して、歌仙絵における書の実相を鮮明化する。

歌と絵に関しては、三十六歌仙絵を中心に、調査しうる諸本の選歌を調査し、前研究で論じた業兼本の性格をさらに鮮明にすべく、編纂方法を検討する。

4. 研究成果

(1) 「書」に関わる面から

歌仙絵作品における和歌の書式の問題につき、きわめて多様な実態とその要因につき、原理から考え直すために、国文学研究資料館蔵田安德川家旧蔵入木道伝書における諸資料の分析を踏まえ、歌仙絵の書との比較・検討を行うことにより、歌仙絵の書の特性をめぐる考察を行った。

(ア) 「詩歌合」歌の書式

歌仙絵とは直接に関わらない『詩歌色紙形』を素材に、書道研究における先行説を踏まえて用例を分析した。本書に展開する散らし書きは、伝統的な型とともに、新たな造型された多様な形が多く、その構図は大きく二つに集約される。一つは段組みの構成であり、もう一つは紙面半ばから書き始めた行を右の冒頭に返して続ける「返し書き」である。後者の水平方向の定則を逸脱する力は、前者の段組み構成にも及び、下から上へ垂直方向に展開する段組みも登場する。

こうした水平・垂直の両方向に定式を逸脱する営みが、他の方向性においても新たな文字配りを許容するように働き、以て右上・左下・右下・左上へと移る襷掛けも生まれ、文字をどこから書き始め、どう連ね、どこで書き収めるか等、一紙面に記す和歌の文字の配置が自在となったと判断される。

さらに留意すべきは、左右対称の構図の多さであり、これは、作品全体のレベルにおいて、すべての番いの和歌・漢詩を同一の散らし書きの型で書くことと関わっている。同じ型の散らし書きは、照らし合わせて読む興味を求めた可能性があり、書としても和歌と漢詩の文字配置の対比を味わう興味が求められたと見られる。絵に関わらない本詩歌合は、書式の面において歌仙絵作品の基本となる属性と一致することが導かれるのである。

(イ) 『百人一首』歌の書式

『百人一首』歌を扱う複数の『百躰色紙形』を、持明院家伝統の散らし書きを参照して解析した。伝統的な型を含め、きわめて多様に展開する型は、「対称」（線及び点）と「反復」の原理に基づく形の二つを基本とする。行移りで差異を示す例も多く、中には右上から紙面の周囲を書き進め一周する特異な例もある。幾何学的な構造の例も多く、その原理による散らし方は過半を超える。これらの造型は、「立石」等の自然物に喩えられる不均衡な形を基本とする伝統的な型を大きく逸脱する。入木道家でこれらの散らし書きが多数生み出される理由は、異なる百例もの事例を造型するには、非作意的な偶然性の手法では不可能であり、他と異なる形であるために、その作意の明瞭な説明が必要であるからである。

ただし留意すべきは、幾何学的に整序された型が、対照的な伝統的な型と対立すると見えて、全くの無関係ではないことである。伝統の類型に「高山」と称される散らし方がある。富士山を思わせる線対称に文字を配する幾何学的な構図である。それが意味するものを含め、書式の多様に分化する実態が検討されなければならない。

(ウ) 考察

まず留意されるのは、『詩歌色紙形』の三十六例に比し、三倍近くの型を示す『百躰色紙形』に「左書き」例が異本三種を含め皆無であることである（異本中に例外一例）。伝統的な散らし書きの型として「左書き」があるにもかかわらず採用されないのは、左書きが画賛に発生し、絵を伴う歌仙歌合形式の構造と連動するからである。三十六歌仙絵の書式には、左方が左書き・右方が右書きの「真」、歌人の顔の向

きで左書き・右書きが決まる「行」、すべて右書きの「草」の三種がよく知られ、入木道伝書中には歌合形式の六歌仙絵の書を「草」で示す例もある。対して、種々の百人一首絵の書に、基本的に左書きは乏しく、稀に採用する例も歌合形式を取る。絵は多様で書も千差万別ながら、三十六歌仙絵の書式との明確な差異は左書きの有無にあり、その根本の要因は作品の属性にあった。逆に三十六歌仙絵でも歌合形式を意識しない作に左書きは現れず、ここに絵と書式の相関が、基づく秀歌撰の性格の差異を通して確認されるのである。

次に散らし書きの幾何学的な構図について検討した。構図の自在さを可能とする前提として、書き記す平面の限定という条件が存する。複数の特異な散らし書きを見せる『元永本古今和歌集』に左書きが無いのは、読む行為が紙面の後続を必要とするからである。歌仙絵作品はその形態を問わず、書はすべて一面で完結し、その限定ゆえに自在な造型が可能となった。加えて「色紙」の場合、史的に果たしてきた役割も見逃し得ない。例えば『夜鶴庭訓抄』に色紙は「扉」の「本文を絵に合わせ」、「よく文字続きを草案」すべき旨が記される。扉・障子・屏風等の図様や絵画と共存する色紙形では、新しさを求め、書式の独創が追究されてきた。その営みにおいて自在さが志向され、自然に比される東洋的な構図とともに、整序された幾何学的な構図も生み出されたと考えられる。

日本美術史には伝統的に「対」の構図で味わう絵画があり、桜と紅葉は対称の構図のもとに対照されて、差異が楽しまれた。その例同様、歌仙絵に書かれる文字は基本的に仮名でその大きさも形もさまざまである。周知の如く、活字と異なり、それぞれ複数の変体を有して不揃いな仮名は、書かれる際、大きさ・形とともに線も太さ・勢い・墨色・かすれ等により揃わない。その仮名で対称に書くことにより生じる興味が、高山散らしに求められたはずである。

東洋的な不均衡の素材を扱い、優れた感覚で全体の統一を図る日本的な「不均衡の均衡」とともに、整序された均衡の構図に不揃いの素材を置く「均衡の不均衡」も存し、その共存が「書」を豊かにしたと考えられる。均衡に果たす歌仙絵の書式、とりわけ二首を取り上げ、番えることにより味わわれる歌合形式が果たす役割の重さが改めて確認されるのである。

(2)「歌」に関わる面から

三十六歌仙絵における所収歌の実態の解明を進めるべく、管見の及ぶ限り諸本を比較・検討し、選歌の方法を検討した。今日有力な所収歌における六系統説を踏まえ、異同の精査により、さらに多くの派生する類型が認められる中、調査の限りでは典拠が藤原公任撰の『三十六人撰』（以下「公任本」と略称）と藤原俊成編とされてきた『俊成三十六人歌合』（以下「俊成本」と略称）のいずれかを踏まえる二系統に大別されることを明らかにし、それらの系統を整理した。公任本と俊成本を集成した『三十六人歌合』（以下「広本」と略称）をも踏まえ、諸系統本を精査すると、業兼本は俊成本の選歌ときわめて近く、一見その系統本と位置付けられる。ただし、六系統本がすべて広本所収歌によるのとは異なり、業兼本は独自の採用歌を有する。さらに、俊成本の選歌が『時代不同歌合』に基づくことを踏まえ、業兼本の選歌を分析すると、その選歌は『時代不同歌合』の原理を受け継ぐことが明らかとなる。以て、対比と相補により新たな意味の生成をめざす『時代不同歌合』の原理を業兼本が踏襲すると推定したとする前研究の仮説は補強される。以上の解明により、業兼本の絵において指摘されてきた後代への影響の大きさは、歌の面からも認められることを導いた。

(3)「書」の「絵」・「歌」との関わりについて

歌仙絵の和歌書式を入木道伝書の言説を踏まえて検討を重ねると、個々の和歌のみならず、作品全体においても、統一と多様の志向に分化して、文字通り多様である。そうした試みを展開させる根本の誘因は、和歌を対比して示すことにある。対面で向き合い、相対する姿勢を取る、その対称の構造を書の位置で示し、顔の向きで行移りの方向を定めたことが、書の世界で模索された散らし書きと関わり合い、書作品の書法が多様化し、深化したと考えられる。

「歌」については、三十六歌仙絵諸作の調査から、基本を同じくして部分的な差異を有する伝本がきわめて多く、厳密な系統分類は困難であることを踏まえた上で、典拠を、藤原公任撰の『三十六人撰』と藤原俊成撰とされてきた『俊成三十六人歌合』のいずれかとする二つに大別されることを確認した。その中で、新歌の採用と作品の構造において他作と異なる「業兼本三十六歌仙絵」の歌は、選歌・編集ともに『時代不同歌合』の原理を受け継ぐことを明らかにした。

「絵」につき、三十六歌仙絵が時代不同歌合絵を継承すると見る説が有力になった現在、「歌」においても、上記の通り『時代不同歌合』を踏まえた性格が導かれることを踏まえ、歌仙絵の「書」のさらなる解明が望まれる。

幾何学的な構図を含め、作意的な散らし書きは遊戯性を有する。ただし、色紙に書かれる書は、その元来の装飾品としての属性からも、デザイン性・意匠性が求められ、入木道家においてもそれが継承されてきた。そもそも入木道においては、稽古を積み、優れた線と形の文字を書くことが重要であり、散らして書く創造も今日的評価に叶う芸術性のみを求めていたわけではない。

本源的に不揃いなものの均衡を図ることが目指されたのは東洋の文化として当然ながら、その均衡を図る感性には、揃えられ均等に対比される構図を不揃いな素材で完成させ、以て生じる興趣を尊ぶ感性も確かに存在していたに違いなく、そこに果たした歌仙絵の役割は小さくなかったと考えられる。

〔主要引用注〕

森暢『歌合絵の研究 歌仙絵』(角川書店、一九七〇年)、真保亨「業兼本三十六歌仙絵」『美術研究』三二五、一九八三年九月)、土屋貴裕「三十六歌仙絵の成立と「時代不同歌合絵」」(『大和文華』一三五、二〇一九年八月)、新藤協三『三十六歌仙叢考』(新典社、二〇〇四年)、田仲洋己『中世前期の歌書と歌人』(和泉書院、二〇〇八年)、桑田笹舟『仮名書道概説』(楽書学院、一九三五年)、名児耶明『書の見方 - 日本の美と心を読む』(角川学芸出版、二〇〇八年)、笠嶋忠幸『日本美術における「書」の造型史』(笠間書院、二〇一三年)、萱のり子「元永本の美学」(和歌をひらく 第二巻『和歌が書かれるとき』岩波書店、二〇〇五年)、金子馨・海野圭介「国文学研究資料館蔵田安德川家旧蔵入木道伝書 解題(世尊寺家篇)」『調査研究報告』三八、二〇一八年三月)、同「国文学研究資料館蔵田安德川家旧蔵入木道伝書 解題(持明院家篇)」『調査研究報告』四〇、二〇二〇年三月)、金子馨「定型化する散らし書き - 中院通茂筆「三十六歌仙画帖」を中心に」(『出光美術館紀要』二四、二〇一九年一月)、企画展「対 で見える絵画」(二〇二〇年一月九日～二月十一日、根津美術館)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 寺島恒世	4. 巻 10号
2. 論文標題 三十六歌仙絵における和歌―業兼本が目指したもの―	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 武蔵野大学日本文学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 3-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺島恒世	4. 巻 10号
2. 論文標題 散らし書きの種々相 『百躰色紙形』を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 武蔵野大学日本文学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 3-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺島恒世	4. 巻 98-11
2. 論文標題 隠岐本『新古今和歌集』再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 63-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺島恒世	4. 巻 9号
2. 論文標題 文字を色紙に書くこと	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 武蔵野大学日本文学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺島恒世	4. 巻 10号
2. 論文標題 『百人秀歌』覚書	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 武蔵野文学館紀要	6. 最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺島恒世	4. 巻 127
2. 論文標題 藤原定家と後鳥羽院 百人一首をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鶴岡	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺島 恒世	4. 巻 133
2. 論文標題 これからの古典研究 大規模学術事業に関わって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国文学言語と文芸	6. 最初と最後の頁 5~23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 17件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 古典文学 (和歌) と書一藤原俊成と西行を通して一
3. 学会等名 日本書道美術館 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 古典文学（和歌）と書—万葉集・古今和歌集を中心に—
3. 学会等名 日本書道美術館（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 有名歌人で楽しむ新古今和歌集
3. 学会等名 早稲田大学エクステンションセンター 秋講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 古典文学（和歌）と書—『百人一首』を通して—
3. 学会等名 書道大学（日本書道美術館）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 古典文学と書
3. 学会等名 書道大学（日本書道美術館）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 西行の和歌と仏教
3. 学会等名 武蔵野大学日曜講演会（第六二四回）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 古典文学と書
3. 学会等名 書道大学（日本書道美術館）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 日本文学における 和 と 漢
3. 学会等名 書道大学（日本書道美術館）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 百人一首はなぜ編まれたか
3. 学会等名 樺友会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 百人一首はなぜ面白い
3. 学会等名 武蔵野大学国文学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 「百人一首」を読み直す
3. 学会等名 朝日カルチャーセンター立川教室（招待講演）
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 和歌を書くということ
3. 学会等名 日本書道美術館（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 西行の和歌－晩年の活動と自筆書状－
3. 学会等名 日本書道美術館（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 『百人一首』再考－歌仙絵の問題を通して－
3. 学会等名 都留文科大学国語国文学会春季講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 寺島 恒世
2. 発表標題 藤原定家と後鳥羽院 『百人一首』をめぐって
3. 学会等名 鶴岡八幡宮献詠披講式講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 百人一首と歌仙絵
3. 学会等名 総合研究大学院大学日本文学研究専攻特別講義（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 百人一首の諸相及び歌仙絵
3. 学会等名 日本古典籍WSホノルル2017（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 寺島恒世
2. 発表標題 「三十六歌仙絵」と「百人一首絵」 - 歌合及び「歌合絵」との関わりから -
3. 学会等名 第38回 山陰 知 の集積ネットワーク研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 寺島恒世	4. 発行年 2018年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 94
3. 書名 百人一首に絵はあったかー一家が目指した秀歌撰	

1. 著者名 寺島恒世	4. 発行年 2017年
2. 出版社 総合研究大学院大学日本文学研究専攻	5. 総ページ数 52
3. 書名 百人一首と歌仙絵（特別講義36号）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------